



The Houses that Love Builds

病気の子供と家族のために

LOVE ロナルドマクドナルドハウス

愛が建てた家

「マクドナルド」といえば、子供から大人まで誰もが知っているハンバーガー・チェーンであるが、「ロナルドマクドナルドハウス」という名は、アメリカでは、病気の子供と家族のための宿泊施設として大変有名である。

マクドナルドハウスがつくられることになったのは、フィラデルフィア・イーグルスというフットボールチームのフレッド・ヒル選手が、3才の娘を白血病で亡くし、その時に病院に泊り込んで付き添った経験から、多くの親達が病室の床や椅子で眠りながら子供達を看病しているのを知ったのがきっかけである。

入院生活を余儀なくされるような重い病気の子供には、親の付添いが不可欠であるが、治療設備の整った専門病院は、自宅からは遠い都市にある場合が多い。そのため、家族は病院や近所のホテルなどに泊まらなければならない、交通費、宿泊費などの経済的負担は重い。払いきれない家族も多い。しかも、家から離れ、友人もいない場所で子供の病気に心を痛める家族は、心身ともに疲れ、孤独とストレスに苦しんでいる。

これらの人々の力になりたいというヒル選手の志は、イーグルス、フィラデルフィア小児病院のエバンス医師、地元のボランティア、さらにマクドナルド社も動かし、病気の子供をもつ家族のための休息と宿泊施設をつくらうというマクドナルドチェーンを利用した大々的な募金キャンペーンとして盛り上がっていった。その収益によって、1974年、ついに第1号のロナルドマクドナルドハウスが完成したのである。同様の運動は、またたく間にアメリカ中の都市に広まり、小児病院のあるほとんどの都市にマクドナルドハウスがつくられるようになった。さらに、カナダやヨーロッパ諸国などにも広がり、現在では、アメリカ、ヨーロッパを中心に、約130ヶ所につくら

れている。

マクドナルドハウスでは、原則的には5ドルから15ドル程度の宿泊費用を支払うことになっているが、経済的に支払いが困難な場合には、無料で泊まることができる。建物には、台所や洗濯機などが備わり、家にいるのと同じような生活を送ることができる。ゆっくりと眠れるよう、寝室で



国立小児病院
小林 登 院長

は完全にプライバシーが保てる。また、同じような子供の病気に悩む家族同士が、悩みを語り合い、慰めあうことができるよう、広い居間のスペースもある。また、住み込みの管理人の住居や事務室、ボランティアの会議室なども備わっている。それぞれのハウスの運営は独立して行われているが、情報交換も頻繁で、家具や備品などを同一規格にするなど、お互いの便宜をはかった工夫もしている。

マクドナルドハウスは、地域のボランティア組織が中心となり、自主的に運営されているのが特徴である。マクドナルド社は、これに対し、募金活動への協力や資金援助という形で協力し、他の多くの企業も、積極的に援助している。マクドナルドハウスは、人々の社会奉仕活動が、企業の暖かい理解と協力を得て、非常にうまく機能している例ということができるだろう。

わが国でも建設を求める声

わが国でも、病気の子供と家族のための宿泊施設を求める声があちこちで上がっている。

国立小児病院の小林登院長は、座長をつとめる厚生省

LOVE

The Houses
that Love Builds



児童家庭局長の私的諮問機関、「これからの母子医療に関する検討会」の答申のなかでも、それを訴えるなど、施設の必要性を説くひとりだ。

「成長過程にある子供にとって家庭の存在はとても重要です。それぞれの家庭は文化をもっています。生活において医療を受けることが理想なのです。最近はその目的にかなう在宅医療をずいぶん試みていますが、入院生活を避けられない病気も多いのです。そういう子供達のお母さんが休んだり、眠ったりするやすらぎの場は、どうしても必要なものだと思います。また、在宅医療の場合でも、定期的に診断を受けにきたときなどに泊まれる場所が必要です。同じように苦しんでいる人同士が慰め合える機会があるというのは、どれだけ助けになるかわかりません。わが国でこれを阻んでいるのは、法制上の問題と、お金を出す側のフィロソフィーだと思います。」

財団法人日本児童家庭文化協会は、1988年から難病とたたかう子供とその家庭への支援活動を行っているが、小林信秋事務局長は、「マクドナルドハウスのような施設は、大変素晴らしいものです。現在、小児の難病は約500種類、人数にすると約20万人といわれています。子供達とその家

族は、病気と闘うだけでなく、医療費の問題や教育の問題にも苦しんでいます。私達は何とか力になりたくて、実際にアメリカの施設を視察し、わが国でもぜひつくりたいと努力しているのですが、日本では、土地や税制の問題などが大きな障害として立ちふさがっています。企業の援助を大変受けにくいのが現状です。人の問題については、わが国ではボランティアが根付いていないといわれますが、知恵をしなければ、その点は十分クリアーできると思うのです。」と、希望を語っている。

同様の声は、現実に難病の子供を抱える母親のグループ、「国立がんセンター母の会」でも高まっている。去る7月17日には、この会と国立がんセンター小児科の大平睦郎医長や江口八千代婦長、ボランティアのキャスリン・ライリーさんらが中心になり、その実現をめざしてパネルディスカッションが開かれ、活発な論議が行われた。

法制上の問題、わが国ではまだ根付いていない企業利益の社会還元意識や個人のボランティア意欲など、日本の「マクドナルドハウス」実現には多くの障害がある。これをどうすれば、乗り越えることができるだろうか。